

## 解答・解説

問1 傍線部の内容を吟味する。

飄然<sup>主語</sup>思<sup>述語</sup>不群

(飄々とした感じで)「思」は「群」することがない。

第一句で「詩無敵」と李白の詩を話題にしている。その「思」なので、詩に漂う情感(詩情)と考える。また「群」は大勢が集まることだが、それを「不」で打ち消している。つまり、その他大勢と同じではない、そこから突き抜けた孤高の詩であるから「無敵」なのである。

- 選択肢判定チェック
- ア その詩情は、ひと所にとどまらず果てしなく広がるということ。  
【群はひと所にとどまるという意ではない。(×)】
- イ その詩情は、誰からも真意を理解されない難解なものだということ。  
【群は理解するという意ではない。(×)】
- ウ その詩情は、ありふれた詩からは抜きんでているということ。  
【群】をありふれた詩が集まることと解釈している。(○)】
- エ その詩情は、常に新しいものへと進化し続けているということ。  
【群】は古いまま変わらないという意ではない。(×)】

よって、正解はウ。

問2 傍線部の内容を、第八句とともに吟味する。

何時 一樽酒 重与細論文

「何時」は「いつか」の意。続く「一樽」は一つの、意であって量の多少を表しているわけではない。第八句の「与」は「ともに」と読み、一緒に、の意である。ここから、一樽の酒を飲みながら一緒に詩文について論じ合いたいという内容が読み取れる。なお、これ以前に二人は長安の酒肆で詩について論じ合っていた。

- 選択肢判定チェック
- ア いつになったら思う存分酒が飲めるのかと思悩む心情。  
【一樽酒】は酒の多さを表すのではない。(×)】
- イ いつか会える日が来たら酒をくみかわそうと期待する心情。  
【一樽酒】を分け合って盃を重ねると解釈している。(○)】
- ウ いつもわずかな酒を分け合ってきたと思い起こす心情。  
【何時】に「いつも」という意はなく、【一樽酒】は酒の少なさを表すのではない。(×)】
- エ いつまでも酒を飲みながら話し合っていたと願う心情。  
【何時】に「いつまでも」という意はない。(×)】

よって、正解はイ。

## 漢文の世界 押韻と対句

漢詩にはさまざまなきまりがあるが、その中でも代表的なものが押韻と対句である。押韻とは、偶数句末の母音をそろえること(七言詩の場合は第一句末もそろえる)。ただし、当時の中国での発音に従うので、現代日本語の音読みではうまく理解できない場合もある。また、律詩の第三句と第四句、第五句と第六句は対句にすることが求められる。対句には、ここに見られるような意味的・構造的に類似する正対と、二句でひとまとまりの意味を表す流水対がある。

出典 作者

杜甫(七一二-七七〇)

盛唐の詩人。字は子美。官吏の登用試験に苦勞して合格するが、その後も不遇のうちに生涯を終えた。とくに律詩にすぐれ、「詩聖」と称えられる。

## 15

## 復習

## 「春日憶李白」

## 解答・解説

句形Q  
省略Q  
解答と現代語訳

白や詩に敵無し

白也詩無敵

李白よ、あなたの詩に匹敵するものはない

飄然として思ひ群ならず

飄然思不群

俗世離れた詩情はほかの詩から抜きんでいる

清新庾開府

その清新さは庾信のようで

俊逸鮑參軍

その俊逸なことは鮑照のようだ

渭北春天樹

私(杜甫)は 長安の春の空に向かいそびえる大樹を眺め

江東日暮雲

あなた(李白)は 会稽の日暮れの雲を眺めているのだろうか

何時一樽酒

いつか一樽の酒を飲みながら

重与細論文

もう一度、一緒にこまやかに詩文について論じ合いたいものだ

## 書き下し文

白や詩に敵無し

飄然として思ひ群ならず

清新は庾開府

俊逸は鮑參軍

渭北春天の樹

江東日暮の雲

何れの時か一樽の酒

重ねて与に細かに文を論ぜん

語句Q  
解答

ア読みⅡ いずれのときか

意味Ⅱ いつか

①読みⅡ ともに

意味Ⅱ 一緒に